

スポーツシーンにおけるサムライの考察

A Study of *SAMURAI* in Sports Scenes

1K03B087-7 氏名 小原秀樹

指導教員 主査 宮内孝知 先生 副査 石井昌幸 先生

I 研究の動機・目的・方法

昨今、サムライブームが起きている。それはスポーツというフィールドで特に顕著にみられると言える。例えば2006年ドイツワールドカップにおいて、日本代表チームにつけられたキャッチフレーズは「SAMURAI BLUE 2006」であった。こういった人や集団をサムライと喩える現象はスポーツ以外の場面ではあまり見ることができない。スポーツという文化を経て現代に復活したサムライが一体どういったものであるのかを明らかにし、スポーツ選手がサムライと喩えられる理由を導くことが本論文の目的である。

本研究は、文献を調べることにより行う。

II 各章の要約

第1章では、現代のサムライ像を明らかにするために、映画などにおけるサムライ像と『武士道』『葉隠』にみる古典的なサムライ像との比較を行った。その結果、両者は基本的な要素ではほぼ同じであるが、現代のサムライ像は切腹や復讐などのわかりやすい部分だけが、その背景や内面を無視した形で取り上げられていることが判明した。また、本来武士階級という非常に狭い世界の中の道徳的観念が、日本人全体や外国を意識したものとされていることも分かった。様々な形で操作されたサムライは現代において作り上げられた偶像として存在しているのである。

第2章では、スポーツシーンでサムライと呼ばれる人物として、イチロー選手、為末大選手、ラモス瑠偉監督を挙げ、それぞれの特徴を分析した。イチローがサムライと喩えられる理由は、「孤高の天才が、日本を背負ってメジャーに挑戦し、外国人選手たちの中で活躍しているから」とし、海外のメディアの影響も大きいと考えた。為末の場合は自らサムライと名乗るが、彼の気迫のこもったプレーや聡明な発言、己の道を邁進する姿などの要素がその説得力を増幅させているのだとした。最後にラモスのような外国出身の選手がサムライと呼ばれる条件として、精神力や己への厳しさに加えて、日本への帰化などのようにわかりやすい形で愛国心を示す必要があることを挙げた。また、外国出身選手に対して用いられる「日本人以上に日本人らしい」という表現は、日本人の美德を再確認しようとする自民族中心主義の表れであることも分かった。

この3人に見られる共通点は、(1)己の道を追求している点、(2)精神力や気迫を持っている点、(3)“海外でプレ

ーする日本人、日本でプレーする外国人”という点である。さらに小笠原道大選手を取り上げ、4つめの共通点として外見・風貌を付け加えた。これらの共通点は現代におけるサムライ像と同じく観念化されたものであった。さらに、これらは精神力などのサムライの持つ内面的な要素から捉えるパターンと、海外や外国人といった異質なものととの比較によって浮かび上がってくるサムライという外面的な要素から捉えるパターンに分けることができた。

第3章では、内面的な要素からの考察を行った。上杉正幸の言う、精神主義、自虐主義、修養主義、全力主義という互いに影響を及ぼす4つの構造を持つ「苦しみの価値意識」と比較し、サムライと呼ばれる選手は純粋にスポーツを追求する道楽人としての「楽しみの価値意識」を持つという結論に至った。また、両者の存在のあり方や、フェアプレー精神と武士道精神に共通点が見られることから、スポーツ選手とサムライが類似性を持っていると考えた。

第4章では、外面的な要素から考察した。甲子園球児たちに「高校生らしさ」を求めるように、物事に「らしさ」を求めたがる日本人は、海外で戦う選手にも同様に「サムライらしさ」を求め、サムライが世界を相手に戦うというストーリーを重ねて楽しんでいるだけなのであると考えた。そして、「らしさ」求める意識とは、型にはまる安堵感を求める意識と言い換えることができるのだとした。

また、異質な物事を排除したがる日本人が、海外に対してサムライという表現で自ら異質であることアピールするという矛盾を発見した。これは普段外国人のことを「ガイジン」という“異質”として捉えているがために、自分たちも海外で“異質”として視られたいと感じるからではないか。だから、自らサムライと名乗って異質をアピールし、自分たちも同じように視られているという安堵感を得ようとしているのである。このような「自分たちも」という志向は和を大切に同調志向と言えるのである。

第5章では、まとめとして、スポーツシーンにおいてサムライという表現が使われる理由を、(1)両者の類似性がスポーツ選手からサムライを連想させやすくしているから、(2)海外でプレーする選手などに対して、「らしさ」を求める思考や同調志向からくる安堵感を得たいがために、サムライという表現の持つネームバリュー(異質性)に頼ったから、であるとし、これを本研究の結論とした。